

審査結果の要旨

氏名 小針 誠

戦前期の日本社会において、私立小学校を利用したのは、いかなる社会層だったのか。そこにはどのような動機があり、また、学校側は、どのように受験者を選抜し、学校としての生き残りを図ったのか。本論文は、1920年代から1950年代の東京における私立学校への入学という問題を、慶応、日本女子大学校、成城、暁星、東洋英和の5校を対象に、教育の歴史社会学の視点から解明することを通じて、教育における選抜研究と学歴社会研究に寄与しようとするものである。

本論文は、問題の設定を行った序論、本論にあたる8つの章、結論の各章によって構成される。序論では、戦前期の私立小学校の変遷を簡潔にたどったあと、本研究が解明すべき研究課題として、私立小学校が都市新中間層によって利用されるようになった実態と理由の解明、私立小学校の存廃と入学者の志向との関係の解明、私立小学校が実施した入学者選抜のメカニズムの解明といった問いを提出し、それらの研究課題に応えることが、既存の教育研究にどのような新たな知見を付け加えることになるのかを検討する。

続いて、本論第一部に当たる1章から4章においては、私立小学校の入学者の社会的背景を統計資料によって明らかにするとともに、学校の生き残り戦略として、中等教育・高等教育機会との接続関係が重要であったことが示される。その中で最も特筆すべき知見は、併設の中等学校や高等教育機関をもつことによって、私立小学校が、児童中心主義教育と学歴上昇アスピレーションという、相矛盾する可能性のある都市新中間層の教育要求を両立させることができた点の解明である。

第一部の知見をふまえ、本論第二部を構成する5章から8章では、私立小学校の入学者選抜考査についての分析が行われる。ここでは、入学者選抜が必要となった社会背景の分析、入学者選抜において、学力試験によらない、B.Bernsteinのいう類別と枠組みが共に弱い「目に見えない」入学考査が行われていること、こうした選抜方式への準備を都市新中間層の家族がどのような教育戦略のもとで採用したのか、その結果、どういう児童が合格していったのが解明され、新中間層の文化との親和性が明らかとなる。

これらの実証分析の結果をもとに、結論の章では、選抜研究、学歴社会研究における本研究の学問的意義として、上級学校との接続関係を持つ私立小学校が、戦前期において新中間層の庇護移動を可能にする社会移動のチャンネルとして機能したこと、そのことが児童中心主義の教育を可能にしていたことが指摘される。

以上のように、本論文は、これまで実証研究がほとんど皆無であった、戦前期における私立小学校の入学者選抜のメカニズムと社会階層との関係を解明した点で、今後の教育研究に重要な貢献をなすものと考えられる。このような点から、博士（教育学）の学位論文として十分な水準に達しているものと認められる。